

# ローザンヌ会議の神学的意義と課題

東京聖書学院／東京ミッション研究所 西岡義行

## 1 歴史的概観

### 1. 1910年のエディンバラ会議の課題とその後の神学的検証

- ・重要性と課題……神学の預言者的使命の欠如  
非常に重要なエキュメニカルな会議ではあるが、世界へのいわば楽観主義的世界認識が背後にある宣教のヴィジョンが共有され、推進されていった。ところが、人類史上未曾有の殺戮がなされようとする世界大戦が迫っているにも関わらず、そのような歴史的・社会的現実に対する預言者的使命を果たせなかった。
- ・20世紀前半の、神学的検証とその特色  
そのような、神学的検証の希薄さは、しばしば批判されると同時にそのことが、その後の重要な宣教会議における神学議論に展開される要因ともなっている。
- ・1950年代以降の神学的対立と福音派の展開  
1952年の国際宣教協議会によるウイリンゲンでの会議で、ミッシオ・デイ(神の宣教)の概念が出されて以後、その解釈をめぐり……立場が対立する

### 2. ローザンヌ会議の変遷

- ・ローザンヌでの第一回、世界宣教会議（1974年）における強調点  
聖書の権威とキリストの独自性(真理に関する確信の確認)  
包括的福音理解へのシフト  
「全教会が全世界に全福音を」
- ・ローザンヌ誓約の第6項：「犠牲的奉仕を伴う教会の宣教活動の中で、伝道こそ第一のものである。世界伝道は、全教会が、全世界に、福音の全体をもたらすことを要求する。」とある。ここに、伝道が第一で、その伝道がこの三つの whole を要求するとなっている。
- ・第二回のマニラ会議での以降の展開  
骨子となった三つの全  
戦略的パートナーシップ  
「神学的議論」と「戦略的実践」とのずれと微妙な距離
- ・マニラの会議で出されたマニラ宣言では、「全教会が全福音を全世界に」が骨子となり、この三つの「全」(whole)がクローズアップされることとなる。そこから、具体的な宣教の働きに向かう三百を越える新たな戦略的パートナーシップが誕生し、全教会が協力して全世界を網羅するとする、新たな世紀に向けての世界規模のヴィジョンが描かれていった。  
  
その後、ローザンヌ運動は、貴重な財産として発表された「神学的議論」と世界の現実に機能的に取り組もうとする「戦略的実践」との間に微妙な距離が生まれ、運動自体に失速したかに見えた。
- ・第三回ケープタウンに向けて  
三回に渡るローザンヌの神学作業部会(Lausanne Theology Working Group)による、具体的な神学的検証とプラグラム委員会による計画  
神学作業部会は以下の通り

第1回： 2008年2月タイのチェンマイ the whole gospel

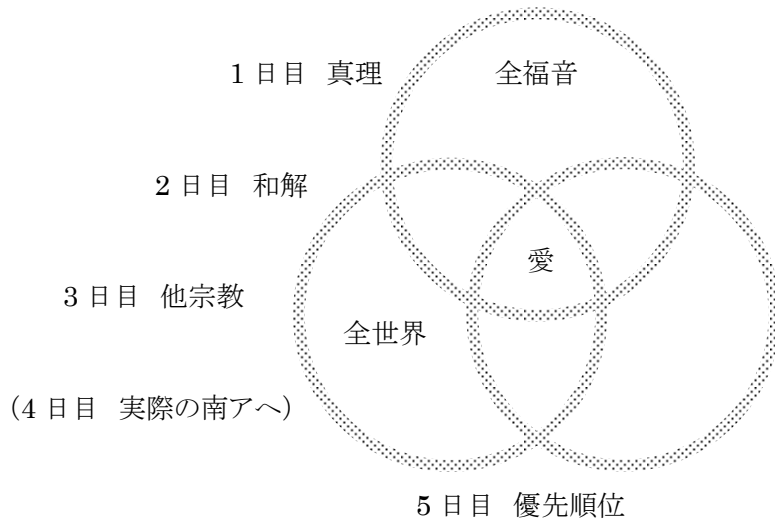
第2回： 2009年1月中米のパナマタイ the whole church

第3回： 2010年1月レバノンのベイルート the whole world

## II. 第3回世界宣教会議の神学的貢献とその課題

### 1 第3回世界宣教会議の神学的枠組み

- ・三つの「全」を総括する愛……



### 2. 神学の役割の回復とその位置づけ

- ・世界の現実から、聖書を見直し、今の教会への神学の預言者的役割を回復し始めた。  
福音派の教会は、20世紀における躍進の中で、教会の世界の拡大維持を目指す、自己目的化したあり方が、結局のところ、福音を矮小化させた。そして、世界の現実から遊離した部族化し分断化された世界を作り上げ、自らが安住できるその特殊世界を維持しようとするが、社会の闇や課題、地球規模の課題などに責任ある姿勢で臨むことなく、気がつくと、結局は社会の闇が教会世界に入り込んでしまったのを見るのだ。だからこそ、クリス・ライト神学委員長は、福音宣教を危機に迫りやるものは、他宗教でも迫害でもなく、神の民の中に入り込んで見ざる偶像であるとし、悔い改めと福音派の「宗教改革」を迫った。

- ・神学の位置づけの変化 テーブル会議の有益性とその限界

分析的知のあり方を追及する神学的作業は、ある特定の領域とある特定の視点から、ある前提と専門的知を共有するものたちによる、ある種の排他的枠組みの中でなされる還元主義的な知の偏狭性、ものごとの包括的視野の欠如の危険、さらには、人格的、責任的関与を伴わない議論へと発展する危険がある。だからこそ、それとは対極にある対話やローカル性、さらには、証における包括的表出は、その神学的弱点を補うことを可能とする。

### 3. 福音派の根本的課題とリーダーシップ

- ・真理認識の課題:

普遍的真理の存在への信念とその真理への追求といった近代主義的知のプロジェクトは、それらを支えたプロジェクトそのものの前提がぐずれることによって、その根底から信頼性を失ってしまったとされる時代に突入した。

さらに、9・11以来、世界は宗教と文明の関係の混乱から、さまざまな権威に対する挑戦が投げつけられ、真理への確信の持ち方そのものが問われ始めている。

福音派がこの問題にどのように捉えるかについては、まだまだ議論がなされないままになっている。(もちろん、ネット上では、そうした議論が Briefing Paper などになされている。)

- ・J.ストットから C.ライトへ その貢献と課題

こうした、今回のテーブルを重視した世界会議のあり方、神学的機能、また真理の捉え方は、J.ストットの著作の反映と見ることができる。特に *Truth to Tell* として、それを継続する中で、旧約聖書神学を宣教的視点で捉える C.ライト氏が選ばれていることは、今後の発展に期待したいが、始まったばかりともいえる。